

日本いも類研究会と共に歩いて

(有)菊水堂 代表取締役 岩井 菊之

WINDOWS95が出て、大きく情報社会が変わった実感がある。

1. 伝達スピード
2. 情報の公開
3. 情報の共有

これらが、画期的に変わったのである。

WINDOWS95が出た翌年の1996年に発足した日本いも類研究会（以下、「研究会」という）は、本年3月に第13回の研究会総会を終えた。現在は、研究会事務局を(有)いも類振興会に置いている。研究会は、インターネットを中心とした活動を行ってきたある意味特殊な存在の研究会である。これからこの2つの組織が連携して何ができるか「いも類振興情報100号」を迎え、提言を試みよう。

私は、ポテトチップ業界に入ってから25年になる。この間にじゃがいもについていろいろな疑問を持ち、書店でじゃがいも関連の書籍を探し、さまざまな研究機関を訪問する中で、情報を集めた。実は、私の専攻は薬学であり「農学」については、全くの素人でじゃがいもの情報を得るために何から手を付けてよいか、皆目見当が付かなかった。手当たり次第情報収集したと言える。

WINDOWS95が発売された翌年に、個人的な趣味からNIFTYの家庭菜園のフォーラムに参加し、じゃがいもについて

の思いや疑問について発言した。このフォーラムで、TYさん、伯爵さん、五升芋さんなどの皆さんとお会いすることになる。そして、このフォーラムに参加していた有志などで研究会は発足された。会員番号12番の私は、研究会の会計監査を引き受けた。

早10年以上が過ぎメールのやりとり、総会での出来事などいろいろなことが思い出される。初代会長の梅村芳樹氏は、じゃがいも料理を総会の度に出され、提案されていた。当時は、明るく気さくで料理好きな会長としか私には映らなかった。今思えば大変なエネルギーを費やされていたことがわかる。その費やされたものが、私の心に残っているだけで、目に見える形で残っていないことが大変残念に思えてならない。

なぜなら、じゃがいもは、用途により品種を選ばなければならない作物で、新品種を育種したとはいえ、どの用途にどうアレンジしたらよいか、情報を広めなければ、実需者は手を出さないものだからだ。つまり、新品種にあった用途をレシピ提案する必要があったのだ。

当時のレシピが自由にインターネット上で見ることであれば、お店で新品種を手にとった消費者は、フライ用、煮物用、サラダ用として、アレンジができたものと思



じゃがいもの展示（農林水産祭「実りのフェスティバル」）



さつまいもの展示（農林水産祭「実りのフェスティバル」）

われる。

インターネットは、情報を得る手頃な手段である。学生をはじめ、主婦、料理研究家、加工業者などさまざまな人たちの検索や情報収集に、大きな役割を果たしているのである。一方、インターネットは、情報収集などに万能と思われるが、私は、そうは思わない。

私にとって、インターネット上の重要と思われる情報は、必ず印刷を経て、手元に保存し利用している。印刷された活字は、固定した情報として、知識として、活用している。しかし、インターネット情報は、混沌とした情報の氾濫でもあり、混交玉石である。

仮想社会と現実社会のギャップ、電子データの文字と印刷された文字のギャップ、情報の氾濫を常を感じている。この2つの道具を有効に使いこなしていくことが

肝要である。

「いも類振興情報」は、出典が明らかな信頼性の高い紙媒体での情報誌である。この情報が電子媒体として公開されるのであれば、より正確な情報を、場合によっては最新情報を、一般の方へ届けることが可能であり、検索、情報収集の手助けとなり、さらにじゃがいもの新規用途の開発や普及につながるものと考えてるのである。

無論、今まで通り「いも類振興情報」は紙媒体として印刷され活用されることは必要である。また、活動として、(財)いも類振興会は、人と人とが触れあう各種会議を実施し、農林水産祭「実りのフェスティバル」(写真)などを企画し、消費者や需要家に「じゃがいも」や「さつまいも」などのいも類を身近に見て触れてもらう機会を作ること、大変大事なことであることは言うまでもない。